

## お祭り好きがなぜか似ている

スペイン・パンプローナの牛追い祭りに参加、猛牛の角でケガをした日本人がいた。ヘミングウェイの小説「日はまた昇る」で有名になった7月の宗教儀式なのだが、闘牛場で使う牛と狭い道を走って競争する。これまで14人の死者を出しているというから危険極まりない。なんとバカな祭りと思われても仕方がない。

もうひとつ驚いたのがボリビアのアンデス高地マチャ村のインディオ系民族の殴り合い。「TINKU」(ティンク=「出会い」の意味)と呼ばれる恒例の祭りだが、これを写真家の森井勇介氏が取材し、本にまとめた。

民族衣装の男たちが集落ごとにチームを編成、他の集落と「出会う」と戦いが始まる。代表者が出てきて素手で殴り合う。目的は「血を流す」ことだから、現場は凄惨な図となる。顔が曲がるほど殴られ、目がなくなったようにみえる人もいる。

理解不能な「ルール無き格闘技」といってよい。でも「出会い」祭りの目的ははっきりしていて「流れた血は大地の女神に捧げられ、翌年の豊作をお願いする」のだ。血は男の勲章だから徹底的にやる。アンデス高地では今でも、チチャ(トウモロコシのビール)を飲むとき、まず大地の神のために少しこぼしてから口にする。

彼らインディオ系民族は太陽神を信仰している。インカ時代、神への捧げものは「いけにえ」だった。こういう宗教儀式としてのお祭りは単純にバカな真似と笑うわけにはいかない。

所かわって日本。長野県諏訪大社の6年に1度、柱を建て替える

神事「御柱祭」が今年行われた。山から十数メートルのモミの巨木を切り出し、大勢の氏子が運ぶ。最大の見せ場は急傾斜の坂を滑り落ちる瞬間。巨木にしがみついていた人たちが次々に振り落とされ、下敷きになる人もいる。

そこまでは無事済んだが、大社の上社本宮に納められた御柱を立てるとき、氏子のひとりが柱の上から転落死した。この神事では2010年に2人、92年、86年にも死亡事故が発生している。日本最古の神社といわれ、伝統を守っているのだろうが、まともな神経ではついていけない面もある。

宗教心がなければ理解できない祭り、何かに憑かれたような神々しい祭りも世の中には存在するようだ。

命がけのお祭りのニュースを聞いて、ラテンも日本も「似ているな」と思った。

ラテン国の人たちと日本人はお祭り好きだ。ラテン最大のお祭りはブラジルのカーニバル。あの踊りとサンバ音楽の狂騒ぶりは他の追従を許さない。最近はお祭り好き同士が手を組み、8月は浅草サンバカーニバルが常設化した。ブラジル人と日本女性が踊りを競い合う姿は妙に違和感がない。

カーニバルそのものはキリスト教の謝肉祭の時期だから、当然欧州のアンソロサクソンの国にもある。しかし北半球では冬の2-3月に当たるため盛り上がり方も控え目だ。

一方の日本は勇壮な夏祭りが特色といえる。冬にお祭りが無いわけではないが、開放的になるのは夏だ。先祖を敬い、豊穰を願い、やおよろずの神に感謝するお祭り。南は博多祇園山笠の威勢のい

い掛け声から始まり、8月の四国はご存知阿波踊り(徳島)とよさこい祭り(高知)で盛り上がる。

阿波踊りは「連」と呼ばれるチームごとに参加する。ブラジルのカーニバルの「エスコラ・デ・サンバ(学校)」とチームプレーの発想は同じだ。阿波踊りの伴奏は2拍子の笛や太鼓。とりわけ女踊りが美しい。

浴衣姿で編笠あみがさを深くかぶり、下駄をはき、リズムを取りながら列を崩さず進む。「ヤットサー、ヤットサー、ヤットヤット」と掛け声を発しながら両手を上にあげて踊る姿は実に優雅だ。

近畿地方には言わずと知れた7月の京都祇園祭りがある。盆の季節には奈良と京都で大文字の送り火が行われるが、これらは大騒ぎをせず、静かな祭り。

夏祭りは東北地方が派手だ。有名なのは青森のねぶた祭り、山形の花笠祭り。バカでかい山車や踊りが見物客の度肝を抜く。寒い冬に我慢したエネルギーを一気に発散するかのようだ。筆者が住む神奈川県でも夏になると、どこかでテケテケテンテン、ピーヒャララと笛と太鼓が鳴っている。

日本人はアンソロサクソンとラテンのどっちに似ているか。そんな問いかけをずっとしてきた。ニューヨークやロンドンでもお祭りを見たが、せいぜい「大行進」という程度だ。お祭りに関しては軍配はラテンにあがる。

アンソロサクソンの規律と合理主義は日本人に近いとの説もあるが、そんなことは承知のうえでの“個人的裁定”である。

(日本ブラジル中央協会  
常務理事 和田 昌親)